「黒い雨」略注

寺横武夫

一

「黒い雨」は、昭和四十年一月号から四十一年九月号にかけての『新潮』に二十一回にわたって連載され、その年の十月、今度は、二十章構成に改められて新潮社より刊行された。

連載時から評判を呼び、その後も世評に応ずる形で、『新潮日本文学17』（昭四五・一）、新潮文庫（昭四五・六）、『現代日本文学大系65』（筑摩書房、昭四五・八）、『井伏鱒二全集』第十三巻（筑摩書房、昭五〇・四）、『井伏鱒二自選集』（集英社、昭五三・一一）、『新潮現代文学2』（昭五四・六）などに収めて行われてきた。ところが、これだけ迎えられてきた作品も、成立するまでの行程は平担でなく、少なくとも二つの難局をのり越えてこなければならなかった。連載途上で遭遇した改題がその一つであり、初刊本上梓時に迎えた本文の改訂が、そのもう一つの局面である。

改めて断わるまでもなく、連載当初、この作品は、第一回から第七回までは「姪の結婚」と題して書き継がれ、それが、第八回分に至ってにわかに一変しなければならなかったという経緯をもつ。

なにゆえか。初出誌は、それに触れて「作者の希望により表題『姪の結婚』を『黒い雨』に改めました」（昭四〇・八）という以外を伝えない。あっさりしたものである。だが、そうした、のっぺりした水平からこの破格が突出するはずもない。「作者の希望」が介在したとすれば、それによって透視されてくるのは、いかに唐突でも、あえて改題に踏みきらねばならぬほどの事情がそこにあった、ということでなければなるまい。

では、なにがあったか。水底深く繰り広げられていたそのドラマについて、実はもっとも熱心に語ろうとしていたのも作者自身だった。改題決行とほとんど踵を接する時点での証言が、ここにある。

○あれ（広島行―引用者注）は原爆の資料館を見に行ったんです。原爆患者の療養日記や、いろんな人の体験記みたいなもの、二千何百編集めたというんです。

○僕は『新潮』へ「黒い雨」書いているでしょう。原爆患者の女の人が子供産んで死んだんです。その親戚の人が療養日記とか、お医者さんのカルテを見て説明を引受けてくれるというので書き出したんです。そうしたら遺族の人が、それより前に、療養日記は見るのも涙の種だって燃しちゃったんです。途方に暮れたです。小説も途中で切らなきゃいけないかと思っていたところに、二千何百編集まったって……。（井伏鱒二、河盛好蔵「作家の素顔（河盛好蔵連載対談9）」『小説現代』昭四〇・九）[1]

もっとも早い時期の発言だが、これを手初めに、以下、連載終結後の、堰を切ったように続けられる自己解説が、水中劇の全容を明かし出してきたのは周知のことに属する。[2] それは、端的にいえば、姪の縁談にまつわる悲劇を後遺症の問題として描こうとしていた次元から、それをもたらした原爆体験そのものの記録化へと、作者内部の関心の深まりによって作品の重心が移行していった動きに対応する。

○途中から筋書きを変えたんです。敵前迂回して、今度は重松さんのことを書くことにした。

○構成は、未定でした、あとで敵前迂回したぐらいだから。初め、六回ぐらいでやめようと思ったんですが、姪の日記だけで。途中で現物がないから、他のことを調べているうちに、あんなことになった。

○だから作品が妙でしょう。はじめの題は「姪の結婚」です。（原文改行）異常な出来事です。僕は広島県に疎開していても、こんなひどいものとは知らなかった。で、ほかの意味で真面目になったんだ。書く真面目さでなく、事件に対して真面目になってきたんです。（井伏鱒二、小沢俊郎「『黒い雨』のこと（インタヴュー　井伏鱒二氏に聞く）」『国語通信』昭四七・三）

したがって、結果からこれをみれば、表に顕われた「姪の結婚」から「黒い雨」へというコースは、題の改変にとどまらず、修正された「筋書き」の方向をも示唆したことになる。また、完結直後から指弾され、作者もそれを諾っている

構成上の不均衡は、そうして水上に浮き出してきた「敵前迂回」のもっとも明白な一証ということになる。

さて、もう一つの局面である本文改訂にはどういう仔細があったか。従来そこに立ち入った論議は必ずしも多くないが、[3] 例えばその一つ、米田精一氏の手になる「解題」を摘記すれば次のようになる。

昭和四十一年十月、新潮社から『黒い雨』の書名で、まとめて刊行された。その際、初出の旧かなづかい旧字体を、新かなづかい新字体に改めたほか、全体にわたって加筆、削除、訂正が行われた。（中略）なお、初出と現行諸本との間には、固有名詞の変更（尾高矢須子→高丸矢須子、富田工場長→富士田工場長、綿貫柾男＜シゲ子の実兄＞→渡辺正男、尾高吉則＜矢須子の実父＞→高丸好男、竹村医院→大村医院、森谷医院→黒田医院、中条村→常金村、等）、経典の変更（「四弘誓願」「盤若心経」「白骨の御文章」→「三帰戒」「開経偈」「讃仏偈」「阿弥陀経」「白骨の御文章」）、人間関係の変更（岩竹博の長男→甥）等があり、現行の「1」～「20」の区分も雑誌連載区分と必ずしも一致しない。（『井伏鱒二全集』第十三巻、昭五〇・四）

これによれば、列挙された例以外、[4] 「全体にわたって」「行われた」「加筆、削除、訂正」からは、見るべきほどの異同は生まれなかった印象にもなりかねない。が、実際には、もう少しことばを加えてみなければならない側面もあるようだ。

時に昭和四十一年初秋、連載の完結を見るが早いか、一本に纏めあげられようとしていた時期だった。[5] 文字通り、あわただしい間の繕いだが、そして、もとより補筆改変癖をもって聞えた作者の所為ではあるのだが、現行諸本の原型がそうした中から生まれ出たことに変わりはない。以下、初出本文にまで遡ってみた場合、そこに加えられた斧鉞によって、創作方法とかかわるどのような光景が見えてくるものか、あらましをたどってみることにする。

二

唐突な改題が作品の方向転換を顕現させた事件ならば、決定稿を生むための本文改修も、それと同じ論理に従った、軌道の調整運動として始まるのはあやしむにたりない。ただ、その場合、運動のエネルギーは、「加筆、削除、訂正」のうちの「加筆」作業に集中し、かつその方向も、専ら重松の「被爆日記」を初めとする過去の記録部分への補修に向って進んでいた、というのがこの段階におけるもっとも顕著な特色だった。むろん、「姪の結婚」を物語る仮構部分への修正も、その質においては看過できない動きを見せるのだが、運動全体としては、まずそのことを確認しておかなければならない。

さて、主なものを例示すれば以下のようである。すべて、重松の「被爆日記」に対しての「加筆」だった（≪　≫内が加筆部を示す。以下同様）。

○≪ふと僕は、先月の上旬か中旬ごろ敵機の落して行った伝単の文句を思い出した。「いずれ近いうちに、ちょっとしたお土産を広島市民諸君にお目にかけたい」という意味のことが書いてあったそうだ。僕はその伝単を見なかったが、宇品罐詰工場の田代老技師がそう云っていた。矢須子も同僚から聞いたと云っていた。≫（3）

○≪堤防に出る手前のところで小休止していると、巡査部長の佐藤進さんに声をかけられた。「やあ、御丈夫で結構です」と僕が云うと、「あれあれ、顔をやられましたね」と先方が云った。僕は暫時の間の立ち話で別れて来たが、佐藤さんの勤務している中国総監府の大塚総監は家の下敷になって焼け死んだそうだ。（以下、五八八字分略）「総監はそれきり白骨になられました。無残なことです。私は火に追われて逃げ迷っていたのです」と云って佐藤さんは涙ぐんだ。日ごろは極めて磊落に口をきき、眉毛の尻が思いきり垂れているから見るからに明るい感じを受ける。しかし、今日は目が血走っていてきつい顔に見えた。≫（7）

○≪広島市にピカドンが落ちると、郡部各町村から逸早く救護部隊が繰出された。双三郡三次町もそのうちの一つだが、これは徴用で広島市に来ていた三次高女の生徒や三次町方面出身の徴用者を救出するのが目的であった。（以下、一一九字分略）救護部隊第一班の班長で三次高女専攻科の教授である田淵実夫という人も、市外の祇園町まで逃れて卒倒した。無論、被爆した三次高女の生徒はみんな即死したそうだ。

（附記―戦後、僕はふとしたことから田淵実夫氏と知りあいになった。田淵さんの話では、昭和二十年八月六日の朝、出勤前に新聞を見ていると、空に淡いスパークが走ったような気持がした。（以下、八六五字分略）三次町の場合は、山を隔てているので広島のクラゲ雲は見えなかったろう。三原市は広島市から三十里だが、西の山が低いので見えたそうだ―後日記）≫（11）

○≪工兵隊の一等兵が戸坂の被爆者仮収容所へ避難して行く途中、大賀村の農

家へ水を貰いに来て喋ったという話。（以下、一〇七字分略）ピカドンが落ちてから、急に軍の命令系統が乱れて軍規が廃れ、将校のうちには兵卒に対してびくびくするものがあるようになったそうだ。≫（11）

○≪いろんな情報も聞かされた。旅館のお客たちからそういう内密の話を聞かされるのだ。あるお客さんの話では、（以下、二一九字分略）「処置ないです。もしも、あんな戦車が英軍のマレー戦線に二台でも間にあったとしたら、日本軍はどうなっていたろうか」と、そのお客が云ったそうだ。これはもし本当のことだとしても歴然たる流言蜚語である。≫（15）

○≪（附記―大野浦国民学校の原爆患者収容人数は、八月六日午後五時から九月二十一日まで四十七日間にわたって、一二四六人。（以下、一九三字分略）しかし聞くところによると、戸坂村の国民学校には数千人の羅災者が送られて、収容しきれないので学校の庭ばかりでなく、村の農家の庭も仮収容所になっていた。―後日記）≫（15）

摘記が長くなったが、中略部分も算入すれば、優にこの十倍を越える量にはなるだろう。

これは、一体、どういうことか。書き加えられた話題は、いずれも、全体の文脈とは相即しない、きわめて独立性の高い内容をもつことが瞭然である。すなわち、仄聞した話の集成を意図しつつ、そこに漏れた挿話を追加していったという趣きなのだろう。一つでも多く資料を追加することによって、記録の徹底化が図られているとみてよい。後にも、例えば、「若国で新聞が空中へ三尺上がったんです。置いてある新聞がね。そして、すっと斜めに落ちた。そのこわさを書こうと思っていて書き落した。（中略）広島から七、八里あるでしょう。」「江田島の海軍兵学校のガラス窓がみな割れた。体操していたのはひっくり返った。あんなのも書き落しちゃった。」（前出「『黒い雨』のこと」）と述べたような、そういう補綴になっている。そういえば、二つ目に登場する佐藤進氏、同じく三つ目の田淵実夫氏はそれぞれ実在の人だから、二氏の話が実名のまま引かれること自体、資料追加のなまなましさを物語ったことにもなるだろう。「附記」や「後日記」が目につくのは、他でも、「≪（高橋夫人の消息は知れなくなった。たぶん火に巻かれたのだろう―後日記）≫」（3）「≪（被爆による火傷で激痛を感じた人もあったそうだ―後日記）≫」（8）と挿入されていったのと同質の、この運動の典型例と称しえよう。

大体、こういう具合で、細部の補塡に向っての全力投球という図なのだが、おそらく、こうした努力の、もっとも象徴的な姿をとって現われてきたのが次の述懐部分になるのではなかろうか。連日、「被爆日記」の清書作業に没頭している重松が、一息入れながら妻のシゲ子に語りかけてゆく場面である。「加筆」部を除外してみれば明らかなように、井伏的世界は、通常、話を逸早く鮪の方にずらせていって、こういうふうには深入りしないものだ。それが、ここでは、「事実は事実じゃ」という態度確認のために、あえて手の内を露呈させて恬澹としている。

「おい、今日はどっさり清書したで。ムクリコクリの雲で、避難者が東練兵場でごった返すところまで清書した。しかし、自分で見たことの千分の一も本当のことが書けとらん。≪文章というものは難しいもんじゃ」

「それは、あんたの書く文章が、何とかイズムとかいうのになるからでしょうが」

「イズムというのじゃないよ。わしのは描写の上から云うて、悪写実という文章じゃ。しかし、事実は事実じゃ。≫――おい、その鮪は泥をよく吐かせたんか」（4）

「文章というものは難しい」というのが作中人物のことばたることはまぎれもない。しかし、その実感となると、八月六日の日記をこの時点ではまだ数時間分しか清書していない重松のものだったかどうか。というより、ゆくりなくもそう書き加えてみざるを得なかった作者その人のもの、という可能性がはるかに大きい。少なくとも、重松と作者は、この時同じ精神に立っていたとみて大過ないだろう。

作者は、いま、二十一回に及ぶ連載に一応の形を与え、それをもう一度全体的に見渡して決定稿を得ようと急いでいたのだった。その時、その彼が、「文章というものは難しい」と感じたのは、「書く真面目さ」からだけでなく、「事件に対して真面目になってきた」という経緯まで加わった上での、二重の意味においてだったことは想像にかたくない。

略述したとおり、「産の結婚」という仮構物語だけならば、あるいは「書く真面目さ」の次元に終始していてたりることだった。「かきつばた」（昭二六・六）がそうだったように、搦手流のイブセイズムが薬籠の中にあるからである。ところが、軌道を変えてまで「重松さんのことを書くこと」に傾注してきたとはいえ、「事件に対する真面目さ」からみれば忸怩たらざるをえない。「千分の一も本当のこと」が書けていないからだ。それほど、領略すべき相手は大きく、とらえどころがない。

どうすればよいか。当面すべはない。「しかし、事実は事実じゃ」。この一線は

退けぬかぎり、徹頭徹尾、あるがままの「事実」をもって対峙する以外にない。ひたすら、事実主義（ファクチュアリズム）を貫く。ただ、これはしかし、もはや「イズム」などというのでは間尺に合わない、作法は越えた精神であって、さしずめ「悪写実」とでも標傍してみるしかないものだ――加筆運動の渦中で、作者によって確認されていったのはほぼこうした性格のものだったのではなかろうか。それは、のちになっての、次のような回想によっても徴することができる。「あれはルポルタージュです。あんな前例のないことは空想では書けないもの。」（「『黒い雨』その他」『四季』昭四四・七）「『黒い雨』は小説のつもりで書いたのではなくて、ドキュメンタリーのつもりで書いたのです。事実を大事にして書きました。」（「『黒い雨』のこと」）

そういえば、もともとこの作品は細部の事実を集成してゆくところにその成立基盤があった。同じく作者自身、「この作品は新聞の切抜、医者のカルテ、手記、記録、人の噂、速記、参考書、ノート、録音、などによって書いた」（「感想」『群像』昭四二・一）といい、「なにしろ、いろんなこまごましたことを集めればいいっていうやり方でやったんです。素材の掃き溜めだ。」（「『黒い雨』のこと」）といったことばを残してきたことを想起してもよい。いや、何よりも、作品全体の構成法を思い合せてみなければなるまい。

全編が、「事実」の集積により成りたっていた。むろん、そこには虚実がとり混ぜられていて、作者の証言をもってすると、実の側からは、中核になった重松の「被爆日記」（「『閑間日記』は資料、談話筆記、重松日記、被爆者の記録などの寄せ集めです。」）、「広島被爆軍医予備員・岩竹博の手記」（「岩竹博というお医者の手記がありますが、あれは実際の手記そのままです。」「岩竹さんのメモは大体そのままです。」）、「岩竹さんの奥さんが当時のことを回想的に語った記録」（「奥さんのほうの談話というのは、ノートしたんです。空想では書けませんからね。」）などが活用され、虚の側の、より創作度の強いものとしては、「矢須子の日記」（「矢須子さんの日記もこさえたんです。」）、シゲ子の「広島にて戦時下に於ける食生活」（「あれは空想でこさえたんです。」「食糧メモは通信交換でこさえました。」、以上、すべて「『黒い雨』のこと」による）などが活かされたという。柴田重暉著『原爆の実相』（文化社、昭三〇・八）が実の側からの構成要素ならば、シゲ子の手になる「高丸矢須子病状日記」あたりは虚の側の代表だろうか。そして、これらの中へ引かれる葬送時の「備忘録」、「故充田タカに関する記録」、車中や川原で仄聞する人の話、布告、告知板、さらには明治初頭の曽祖父宛の手簡に至る盛沢山の「事実」が動員されてきていた。

この構成法が、すなわち「悪写実」の具現に他ならない。ということは、作中人物の重松によってそれと意識されるはるか以前から、既に同じ方法意識をもって、作者はここまでおし進めてきていたということを意味する。ところが、全体を見通した上でなお「本当のことが書けていない」と感概にふけらざるをえないほどに、描くべき対象の姿は描ききれていなかった。依然として大きいのだ。しかし、「事件に対する真面目さ」を体得したからには、その「本当のこと」を求めてさらに描きこんでゆくしかない。「悪写実」を重ねてでも、作者の事実主義は徹底化されねばならねばならなかったゆえんである。(6)

三

それにしても、どうして事実なのか。あるいは、これだけ「悪写実」に固執する精神の背後には、どういうものがあったというのか。

○兵隊たちは次から次へと〔リヤカーや畚（ふご）で〕≪戸板やトタン板で≫死体を運んで来て、顔を背けてぼんと穴のなかに放りこむ。それからまた黙々としてどこかへ去って行く。≪兵隊はトタン板の四つの角をぐるぐるに折り曲げて持っている。≫上官からの命令で動いているのだろうが、どんな感慨を催しているものか、その表情では分らない。重圧感のある兵隊靴だけが感情を表に出しているようだ。穴ぼこに死体が多すぎて焔が下火になると、穴のほとりへどしりどしりと死人を転がして行く。その弾みに、死体の口から蛆のかたまりが腐爛汁と共に、どろりと流れ出るものがある。穴のそばに近づきすぎた死体からは、焚火の熱気に堪えきれぬ蛆が全身からうようよ這い出して来る。なかには転がした弾みに、関節部に異変の起きたものがある。たとえば童話のピノキオが、関節部の留釘を抜きとられたことのような始末になってしまう。ピノキオは板と留釘とで組立てられた玩具だが、それでもなお臓を何かに打ちつけると、自分が木であるからして痛さを感ずるそうだ。況んや死体は生前には人間である。(11)（〔　〕内は削除部を示す。以下同様）

○その車には一六、七個の死骸が乗せられていたが、そのあるものはリンネルの敷布でぐるぐる巻きにされ、あるものは毛布に包まれていた。またなかにはほとんど裸体同然の死骸もあった。ほんの申しわけばかりのものをまとっている死骸もあった。こういった死骸は車から投げ出される時、せっかくまとっていたものもはぎとられ、素っ裸のまま累々たる死骸の中にころがって

ゆくのであった。しかし、そういったことは、これらの死骸自身にとってはどうでもよいことであった。また猥雑さということも、はたの者にはもはや問題にはならなかった。これらの死骸はもはやまさしく亡骸であったからである。そして、いわば人類の共同墓地の中に仲良くひしめき合っていたからであった。そこにはもはや何の差別もなかった。貧乏人も金持も、ともども に横たわっていた。いうまでもなく、かかる災厄の時には死亡者の数はとほうもない数にのぼるのだ。いちいち棺桶など手にはいるいわれはなかった。したがって結局以上のような埋葬の仕方以外に方法がないわけであった。実際これ以外にどうしろといわれてもそれは不可能というものであった。（平井正穂訳、以下同様）

前者は「黒い雨」からの、後者はダニエル・デフォーの「ペスト」(7)（一七二二年）からの描写例である。いずれ劣らぬ「悪写実」の好見本というべきだが、同時に、それをそうならしめている作者の眼の近似に気づかぬ者も少ないだろう。「事実を描く天才」（ウルフ）とまで称されたデフォーのこの世界には、「事実は事実じゃ」と考えた精神とどれだけ通ずるものがあったか。

一方が国家を背景においた戦争災害であり、他方がペスト菌発見以前における天災に近い疫病だった点にはいま深入りしないでおこう。問題は、ともに、数十万の人口を擁する都市の大惨劇に遭遇しながら、その中にとどまり、それを内側から観察して記録にとどめようとした時、期せずして事実主義をもって臨んだ、という一点になければなるまい。

「ペスト」は、馬具商を営むH・Fなる人物の眼を通してすべてが語られる。一六六五年のロンドンを襲った大疫を、その一市民が記録していたという体裁をとるのだが、"A Journal of the Plague Year"（「ペスト年代記」）という原題がその本質をよく示しているように、まさしく夥しい史実の集成によって成っている。語り手は、自らも認めるように「好奇心」の権化であり、ひたすら事実の蒐集をめざして惨状の中を渉猟してはばからない。

○私はこの時分のありさまをそっくりそのまま、これを目撃しなかった人々に伝え、いたるところに現出した地獄絵巻を読者諸君に伝えることができたらと思う。もしできたら、それこそどんなに深刻な印象を与え、恐怖を与えることであろうか。

○私のメモランダムはただ事実だけを記し、しかじかかようと、ありのままを述べることを主眼とするものである。

○彼ら三人の男の話を本人たちが話したとおりに物語るがいい、具体的な事実を一つ一つ保証したり、過ちの責任を負(ママ)でたりする必要はない、との読者諸氏のお許しさえあれば、私としては喜んでできるだけくわしく話をしたいと思う。

○絶好の機会ともいうべきこの時期に、私は本を読み、日夜接する種々な出来事のメモを書きとどめていった。現在、こうして私がこの書物を書くにつけても、その素材となったのも、じつはといえばこのメモなのである。ただし、これは街頭で私が拾ったさまざまな状景に関することのみにすぎないことを断わっておかなければならない。私の内奥の省察そのものについて書いた記事は、私としてはただ自分の魂の糧としてそっとしまっておきたいと思う。

こうして、日時の経過を追い、教区毎の地理を追って、病勢の猖獗をきわめるさまが微細に記述されてゆく。とりわけ、『死亡週報』によって確認される死者のリストの羅列の山は、字義通り「数字の文学、統計の文学」（平井正穂「解説」『筑摩世界文学大系』昭四九・五）という名に背かない。

むろん、こうした事実が辟易するほど並ぶはざまには、それとはまた別の事実、郊外に逃れた避難者がどのようなテント生活を送り、どのような食事をしていたか、といった瑣事や、疫病逃れのために「アブラカタブラ」という単語を三角形に並べる呪いが流行していた、といった見聞に至るまで、細々とした日常の姿に筆を運ぶことも忘れていない。いわば、生活上の瑣末な記録も含みつつ、全体として、その上に目を覆わしめる惨事の現出することが願われているごとくだった。

一方、妻のシゲ子に「貧相この上もない食生活」の事実を記録させながら、自らも「被爆日記」の清書に没頭していた重松の姿も記憶に新しい。とくに、記録者としての彼の姿勢は、十八世紀の小説における語り手のそれと見紛うばかりの類縁性を示す。「僕」と「私」という呼称を置換しなくとも、ほとんどそのまま通用しそうな気配でさえある。

○行きずりに見る何千人、何万人とも知れない人たちの風姿様相は種々さまざまであった。（その一部を、くどいようだが現在の僕が記憶するまま左に書きとめる）（3）

○みんな今日の爆撃のことについて話し、誰しも互に連関なく自分の見聞したことしか云わなかった。だから、みんなの話を綜合しても災害の全貌は知れ

ないが、僕は記憶するままにその話をここに〔記録する。但、話に関連がないのは止むを得ないことだと思ふ。〕≪書きとめる。≫（8）

○今、僕は後日のため、この場の田中君と工事長の問答を在りのまま書きとめる。（11）

○以上、僕は今ではもう原爆の怖しさについて、口をつぐんでいる必要がなくなったので、保健婦たちのお灸のまじないも偽りない実状として書きとめた。焼跡を歩きまわって来た人たちの死亡率も統計的に記した。（15）

「黒い雨」の作者は、先の屍体処理の場面について、「悲惨な材料や資料を読んで書いているとたまらないから、ピノチオを出したりして息を抜く。」（「『黒い雨』のこと」）と、その秘訣を漏らしたことがあるが、そうまでして沈着に克明に、事実に立ちむかわねばならなかったのはなぜだったか。一歩でも対象へ迫りたいとする、全体把握志向の強さのゆえ以外ではあるまい。相手が正体の知れぬものであるだけに、一片でも多くの資料をもってその全貌を知悉しないではいられない。それは、何よりもまず、渦中にいながら原爆をまだ原爆と知らない矢須子や重松たちの、「為体（えたい）が知れぬ不安」（6）から生まれたはずだ。

○広島市街に噴火のような黒煙。帰りは宮津町に出て船で〔宇品〕≪御幸橋下≫へ着岸。おばさんは〔怪我〕≪無事≫、おじさん〔も〕≪は顔に怪我≫。世紀的な大椿事である。しかし全貌はよくわからない。（1）

○僕は杉村支店長から日本繊維会社の古市工場の現状について質問を受け、今日は出社の途中から引返して来たから何も分らないと答えた。広島市街の様子についても部分的にしか説明のしようがなくて、全貌について説明することが出来なかった。（6）

そして、このかなわぬはずの「説明」役を一手に引き受けるのが作者という立場だった。彼は、加筆に加筆を重ねて「悪写実」の徹底化運動を進めながら、「全貌」の領略に向けて果敢な挑戦を続けねばならなかった。

○僕の書いていることは、あの出来事のうちのほんの一部分ですね。体験者の一人一人が、あのことを、各自、別な目で見ているんだ。だから、まとまった記録をつくるなら、多勢の作家が、多勢の人から素材をもらって書いて、それを合本にするといいね。僕のは、おもに三人くらいの人が見た世界だから。あれを体験した人や、あの地元の人は、あれではもの足りないんだ。もっともっと、物凄いものだ。（「『黒い雨』その他」）

○「広島のこと」のような大事件は文学作品の対象とするには巨大にすぎる。長編大作でその全貌を捉えようとしても、また二作三作と重ねてみても手にあまる素材である。事件は前例のなかったことでもあり、突如として起ったことでもあり、しかも一瞬にして事態を決したことでもあるし、とても空想に頼って綴り得る対象でない。正確に書こうとすればするほど筆が渋る筈だ。被爆体験者にしても全貌は捉え難いのではないだろうか。（中略）体験の上から大事件について一個人の実感を語ろうとすれば見解が局部的になってしまう。盲人が象を撫でるようなものである。繰返して云うが、その意味からして「広島のこと」のような言語に絶する悲惨な大事件は、たとえ体験者であっても一個人で書き得る対象とは云われまい。原爆小説を発表する良識的な一つの方法は、多数の体験者が各自の見解を忠実に書き綴り、それを互に検討した上で一つにまとめて出版社に渡すことではないかと思う。それが最良の方法かどうかはともかくも、「原爆はもう御免だ。実相はこれだ」という思いを読者に訴えるには一つの方法だろう。（「はしがき」『八月六日〉を描く』昭四五・六）

出版の「方法」は、むろんこの場合、作品の「方法」と読み換えてみて差しつかえないだろう。たとえ最良の方法でなくとも、事実主義に徹することは、原爆の「実相」を把握するための一つの方法であることがここには明瞭に確認されている。そして、こうした方法意識、「全貌」を把えることの困難さと、それゆえに生ずる全体志向の念とは、対象を原爆から異国の大疫に換えてもほぼ変わらない事情にあったといえそうだ。

○こういった話はあの日の凄惨な模様を伝えるのに少しは役立つかもしれない。けれどもほんとうは、実際に目撃しなかった人にあの様相の真実を伝えることはとうてい不可能なことと思う。ただいえるとすれば、それこそ、じつに、じつに、凄惨なものであった、とても口で表現できるようなものではなかった、というくらいの言葉しかいえないのだ。（圏点原文）

○しかし、具体的な詳細な点になると、確実な調査をすることは、とうてい一個人のよくなしうるところではないことがわかった。（中略）私自身はもちろんだが、読者諸氏にも納得していただけると思うことは、ここに書かれているすべてのことが控え目に書かれたものであって、けっして野放図なことが記されているのではない、ということである。

とはいえ、二つの作品を双生児扱いにできるのもこの辺りまでに限らなければなるまい。一体、なにがゆえに、「悪写実」に徹して惨状の全容把握に努めてい

るのか、と問えば、自ら異なる二通りの答えが返ってくるはずだからである。

「ペスト」の世界を貫いているものは大疫をも陵駕する信仰の力だった。この伝染病をもたらしたものは神の怒りの手であり、神が下したものであるからには必ずその救済もあるとする、摂理を信ずる考えである。「私がこのような記録をくわしく残すのも、こういう非常の時に際して、神に対する畏敬の念をはっきりもつべきことを説きたいからである。」語り手が、疎開を断念してまで「悪写実」に徹しえたのは、合理は越えた、そうした摂理の立会人としての立場からであった。事実、読み手がそれをどこまで認めるかは別にして、立会人としての運命に己をゆだねた一人の男の生の力によって、作品を覆う即物的な側面の浄化されていることは認めねばなるまい。

だが、「黒い雨」にはそれに見合うような力学は働いていなかった。「聖書」に代わるものとして「白骨の御文章」があり、安芸門徒に合わせてその他の経典名も変えられた（米田精一「解題」参照）としても、重松は、あくまでにわかに仕立てられた儀式の代行者以上ではありえなかった。改めていうまでもないことだが、彼が「悪写実」の主唱者となり、その努力を営々と重ねてきていたのは、直接には矢須子への気づかいからだった。が、その先には、彼女の不幸をはるかに越えて、あるいはそれをもたらした「黒い雨」をも一部に含む、戦争や狂気への摘発があったことは明らかだろう。

そして、それを抑制しつつ持続してきた。こうした凶悪なものに立ちむかうには、そこで考えたことをではなくて、見てきたことをひたすらありのままに写しとること、そしてできるだけ正確にそれを清書して残してゆくこと、それ以外にないという態度だった。これは、重松という登場人物が日記に向かう姿勢というより、作者自身の写実精神、さらには、この作者の原爆あるいは現実に対する姿勢だったことはすでに触れたとおりである。だから、時としては、なまのままに噴出せざるをえない。最初に引いた屍体処理場面の直前には、「戦争はいやだ。勝敗はどちらでもいい。早く済みさえすればいい。いわゆる正義の戦争よりも不正義の平和の方がいい。」という重松の呪詛があり、直後には「わしらは、国家のない国に生まれたかったのう」という兵隊のことばが連ねられていたのも、決して単なる偶然ではなかったのである。

四

ところで、作者の「加筆」作業は、以上をもってすべて終わったわけではない。彼の朱筆が、「被爆日記」の「悪写実」の世界にばかり向けられれば片手落ちを生むように、われわれも、もう一方の、酸鼻な世界を包むように設定された、仮構部分への吟味を逸するわけにはゆかない。

記録部分を繕う作業が「悪写実」の徹底化運動だったとすれば、現在を物語る仮構部分へのそれは、そうして繕われた作品全体の合理性を獲得しようとする、いわば一種の統一運動として機能したといえるだろう。したがって、新生「黒い雨」の作者としては、その関心を、かつて放棄しかけた「姪の結婚」譚への処理に集中させてゆくのは自然のなりゆきだった。もはや、詳述のゆとりはなくなったが、矢須子物語のその後のゆくえが、「加筆」作業においてどのように処遇されたか、に限って瞥見してみよう。

○≪「矢須子は大丈夫だろうな、古江へ行っておるからね」

「矢須子さんは大丈夫でしょう」≫（5）

○僕は矢須子を娘ぶんとして預かっている以上、この子に万一のことがあっては、シゲ子の両親に対して顔向けが出来ないのだ。≪矢須子を広島へ出て来させたのも僕に責任がある。若い女は田舎にいても都会にいても徴用で軍需工場の女工にされ、ハンマーを振りあげたり砲弾を削ったりする労働をさせられる。それで僕が古市工場に勤めているのを幸いに、ずるく立ちまわって矢須子を工場長の伝達係にするように工作したわけだ。≫（6）

○この熱気のなかに妻と姪を連れこんだのは、無謀かも知れなかった。逃げだせる確信はなかったが、ときどき向うから歩いて来る人もあったので、向うへ行きつけるだろうと半ば自信が持てた。せめて矢須子だけでも逃げのびさせてやりたい気持があった。≪徴用を逃がれさせるため、矢須子を広島へ来させたのは僕の浅智恵からしたことだ。≫矢須子のことは、〔苦楽を共にする〕妻と同一視は出来ないのだ。（6）

正確にいえば、この三例は、いずれも、「被爆日記」の八月六日の逃走を録した部分に対する象嵌である。だが、しかし、記録部への加筆といえども、そこに姪への「責任」意識を貫流させることによって、実質的には、ともすると影の薄れがちな矢須子物語を補綴したことになるのは明らかだ。連載回数からいっても改題決行の直前のところだった。崩壊しかけた仮構意識に対する、作者自身の必死の蘇生の努力と見なさなければなるまい。

なぜなら、重松のこうした思いやりや「責任」感は、「姪の結婚」として始まった、この小説の劈頭の次のような「負目」意識と連続し、かつそれを継承したものであることは疑いえないからだ。

この数年来、小畠村の閑間重松は姪の矢須子のことで心に負担を感じて来た。数年来でなくて、今後とも云い知れぬ負担を感じなければならないような気持であった。二重にも三重にも負目を引受けているようなものである。

（1）

すなわち、主人公の姪に対する痛切な「負目」意識は、「姪の結婚」譚として展開するはずの矢須子物語において最も重要なモチーフだったのである。ところが、それが、圧倒的な勢いで進行する「悪写実」の徹底化運動によって、とぎれがちになってきたため、あたかも思い出したように間歇的に（しかし「悪写実」自体を損うような不自然は避けて）、重松の意識のそこここへ「負目」の断片を縫いとってきたと見ることができるのではないか。

徴用逃れをさせたという、一見くどいほどの同語反復の糊塗作業も、しかし、皮肉なことに、重松においては幾度繰り返しても余りある結果を招来させただけに、それなりの必然性はあったといわなければなるまい。事実、そういう判断もあってか、この作業は、矢須子の発病を告げる「15」章以降へも持続され、もう一度利用されねばならなかった。

重松はこんな恐怖感をそそるような医学上の熱語〔を聞かされるよりも、病気に効く薬を早く調合してもらひたいと思った〕はもう聞きたくなかった。

≪ますます矢須子に対して負目を感ずるばかりである。

矢須子が原爆病にかかったのは、黒い雨に打たれたためばかりでなく、まだ熱気のある焼跡の灰のなかを歩きまわったためもあるだろう。相生橋から左官町に出る途中、匍匐前進するとき矢須子は左の肘を擦りむいた。その傷も死の灰の作用を受けなかったとは思われない。今さら云っても仕様がないが、宇品の日本通運支店から強引に古市の工場へ辿って行ったのが拙かった。もし重松が支店長の松村さんに頼んだら、矢須子を二日や三日は泊めてくれた筈である。その点、重松は責任を感じている。もともと矢須子を広島へ呼んだのは重松である。≫（17）

そして、こうした矢須子物語延命の試みの中で、恐らく最も注目されねばならないのは、作品の結末部に付加された次のような自然描写だろう。荒々しい「悪写実」の世界と、そのために傷つかねばならなかった矢須子とを癒してくれるようにという、あつい願いの込められた「加筆」となっている。

≪これで「被爆日記」の清書を完了した。あとは読み返して厚紙の表紙をつければいいのである。

その翌日の午後、重松は孵化池の様子を見に行った。毛子の成育は上々で、大きい方の養魚池の浅くなっている片隅に蓴菜が植えてあった。たぶん庄吉さんが城山の弁天池から採って来て植えたのだろう。緑色に光る楕円形の葉状が水面に点々と浮んでいるなかに、細い花梗をもたげて暗紫色の小さな花を咲かせていた。

「今、もし、向うの山に虹が出たら奇蹟が起る。白い虹でなくて、五彩の虹が出たら矢須子の病気が治るんだ」

どうせ叶わぬことと分っていても、重松は向うの山に目を移してそう占った。≫（20）

これは、直接的には、清書を完成したばかりの「被爆日記」の最後に描かれていた、「水の匂がするよう」な用水溝の清冽な流れや、そこを遡上する鰻の子、あたりに密生する杉苔、銭苔、水引草、（そして、加筆されたドクダミ）という描写を意識的に延長させた部分とみられよう。だが、その働きとしては、「黒い雨」一篇の方法そのものを圧縮して示した場面とも考えられる。すなわち、ここ数日来、重松の清書によって再現されてきた「悪写実」の地獄絵図を、こうした牧歌的な自然や自然人の空間へ解きはなつことによって相対化するという、作者の方法意識が一つの象徴として読みとれるからである。矢須子に奇蹟が起ることを予想する者は絶無かもしれない。しかし、例えば、農家の土間口で水を所望した岩竹さんに向って、厭な顔ひとつせず、「労しや、咽が乾くでがんしょう。そうでがんしょう、そうでがんしょ」と、冷たい渋茶の湯呑みを差しだしてくれた老婆のように、自然のふところ深くで矢須子がみまもられていることは確かなところだ。われわれとしてもそれだけに、これまで語られてきた無理無体に慣らざるをえない。

これらは、明らかに、作者の意識した方法だった。「事実を大事にして書きました。でも、事実を生かすつもりで、ところどころに架空の挿話を入れました。」と述べる作者のことばに改めて耳をかたむけておこう。

鯉の話はつくりごとです。ま、昔風の田舎の風儀としては、立話はいいんです。また、辻堂で寝るのはいいんだ。しかし、ひとりぶらぶら歩きの散歩なんてことは許されない。僕ら子どものときの田舎の習慣ですね。小畠村は山奥だから、まだまだ田舎風だと思ったが、そのつぎ行ったら、あんな古い習慣なんかない、と言っていた。でも、虫供養とか、日常の平凡な行事を書かなければ戦争の浅間しさが出ないような気がして、対照するために書いたんだ。そんなこと、説明したらまずいけどな（笑）。（「『黒い雨』のこと」）

(1) のち一部表記を改めて河盛好蔵編『作家の素顔』（駸々堂、昭四七・一〇）所収。なお、その際書き加えられた編者の注記には「昭和四十年六月二十六日、拙宅にお迎えして対談。」ということばがある。姪の日記が現存しないことを知って「途方に暮れた」のは、その六月より以前、連載開始も間がない頃の、相当早い時点だったことが確認される。ちなみに、新潮編集部の菅原国隆氏は、それを「連載の二回目」（『黒い雨』と井伏鱒二」『新刊展望』昭四一・一一）のこととして伝えている。

(2) 井伏鱒二「作者の談話」（『サンデー毎日』昭四一・九・二五）、井伏鱒二、河盛好蔵（対談）「井伏文学の周辺」（中央公論社『日本の文学』付録34、昭四一・一一、のち「井伏文学について」と改題して中央公論社『対談日本の文学』昭四六・九所収）、井伏鱒二、河盛好蔵（対談）「『黒い雨』について」（NHKラジオ放送、昭四一・一二・一八）、井伏鱒二「感想」（『群像』昭四二・一）、井伏鱒二、神保光太郎（対談）「『黒い雨』その他」（『四季』昭四四・七）、井伏鱒二「はしがき」（文化評論社『八月六日Vを描く』昭四五・六）、井伏鱒二、小沢俊郎「『黒い雨』のこと（インタヴュー　井伏鱒二氏に聞く）」（『国語通信』昭四七・三）、伴俊彦「井伏さんから聞いたこと（その十一）」（『井伏鱒二全集』第十三巻月報13、昭五〇・四）。その他、未見だが、「私の言葉」（『週刊新潮』昭四一・八・二〇）、題未詳（『東京新聞』昭四一・九・一〇夕）、題未詳（『読売新聞』昭四二・二・一九）、「『黒い雨』執筆前後—被爆25周年にあたって」（『赤旗』日曜版、昭四五・八・二）などの発言も挙げられる。

(3) 一部言及したものに、東郷克美「『黒い雨』感想」（『研究年誌』昭四三・一）、桑名靖治「『黒い雨』論」（『日本文芸論攷』昭四七・五）、寺横武夫「『黒い雨』管見」（『近代文学試論』昭四七・九）、大越嘉七「『黒い雨』論—原爆文学とリアリズム—」（『井伏鱒二の文学』昭五五・九）の諸文がある。

(4) 以上の他に、大越嘉七氏は「場所の変更（例、宇品→御幸橋下）、呼び名の変更（例、義勇奉公団員→勤労奉公団員）」（『井伏鱒二の文学』）を数える。

(5) 形の上から単純計算した場合は、『新潮』の最終掲載日（昭四一・九・一）より初刊本発行日（昭四一・一〇・二五）へかけての一箇月間強となる。けれども、実際には、それを上回る期間が削正に割かれたのではなかったか。上限の脱稿期日に関して、菅原国隆氏の「七月二十一日深更、最後の一枚を書きあげた時には精も魂も尽きはててておられた。」（前出「『黒い雨』と井伏鱒二」）という証言があり、それに従えば長くて三箇月近くが計量されるからである。

(6) こうした消息を裏づけるような作者自身のことばもある。多田道太郎氏の伝える、昭和四十一年十二月十七日の野間文芸賞贈呈式における受賞者挨拶がそれである。「井伏鱒二編著とすればよいもので、賞をいただくのは気がひけます。手放しで喜べないところがあります。被災者の何十万分の二あるいは三の記録として書けたかもしれませんが、それでもまだ本当のことが書けたとは思えません。書き忘れもいくつかあります。たとえば岩国にいた人が、原爆落下の瞬間、八畳間で新聞をひらいていたら、十何センチかそのままの形で上にあがり、斜めにすべって行ったというのです。四方から同時に凄い風がはいったのでしょうか。そういう話は空想で考えつくことはできません。どこへ入れようかとまごまごしているうちに忘れてしまいました。私はポンコツになったのか、そういう大事なことをいくつか忘れてしまいました。被爆した軍医岩竹さんの『記録』はそのまま再録したものです。とにかく、私はこういう立派な賞をいただいて、やましいような気がします。」（「『黒い雨』井伏鱒二」『日本の小説を読む会』会報、昭四一・一一、圏点原文）

(7) 二種の邦訳がある。平井正穂訳『ペスト』（筑摩書房『世界文学大系』昭三四・六、のち中公文庫昭四八・一二、『筑摩世界文学大系』昭四九・五所収）と泉谷治訳『疫病流行記』（現代思潮社、昭四二・五）。ところで、右の平井初訳を、「黒い雨」の作者が参酌するようなことはなかったのだろうか。かつて世界童話名作集の一冊として、同じデフォーの『ロビンソン漂流記』（鶴書房、昭三六・九）を「訳編」していた事実が想起されるからである。年少の読者に向って、「この本が出来たのは一七一九年、デフォーが五十八歳のときでした。一七三一年、七十歳でなくなるまで、たいていのことは失敗して、その一生は幸福とはいえませんでした。」（「『ロビンソン漂流記』について」）と語りかけた時、そこに初訳も出ていた「ペスト」（一七二二年）を数えなかったはずはないと思われるためだが、しかし、今のところはそれを否定する材料もない代り、繙読していたと考える積極的な裏付けもない。